





始まりの唄

キミ達へ～始まり～

【1】

2010年9月17日（金）20:34 高山 ヒナ（21歳）

「ヒナ～！こっちこっち！」

私は店内の中で両手を広げて合図する奈美を見つけた。

「ごめんね、仕事が長引いちゃって」

「いいのいいの！それより何飲む？」

金曜の仕事帰り、次の日を考えなくていい夜は自然にお酒が飲みたくなるよね。

「う～ん・・・とりあえず、カシスオレンジかな？」

「また可愛いの選んじゃってー」

別に私が飲みたいお酒を飲んだっていいじゃん！

そこまでお酒が強い訳じゃない私には精一杯の選択なのに。

「それより聞いてよ！パパがさあ」

パパって言うのは奈美の父親じゃあない。いわゆる『パパ』

「・・・って言うんだよ！？酷いよねー」

「うん・・・そうだね」

正直、奈美の話は私には『基準』が分からない。

どれが酷くてどれがそうじゃないのか・・・

だからいつも肯定だけはしている。

別に奈美の事は嫌いじゃない。

一緒に居て楽しいし、普段聞けない会話が聞ける。

たまに強引すぎる所はあるけど・・・それも含めて友達。

「ねえねえ、ヒナは？最近どう？」

「う～ん・・・最近って言われても、特に出会いは無いし・・・相変わらずだよ」

「勿体ないなあ。合コンとか行けばいいじゃん！」

合コン・・・

正直そういうのは苦手なんだよね。

初対面の人とどう接していいのかわからないし。

それに・・・

合コンで本当に良い出会いがあるとも思っていないもん。

モテル人は大抵が「合コン慣れした楽しい人」

いわゆる女の扱いに慣れてる人。

「いい人紹介しようか？」

「あ、それはホントに遠慮するよ。奈美のいい人ってお金基準だもん」

「あ、確かに」

私達は笑った。

そういう事も面と向かって言える所も仲がいい秘訣かも。

「はあ、食べたし飲んだ！ヒナそろそろ帰る？」

「う～ん・・・私は奈美に合わせるよ」

私はいつも奈美と食事に行くと時間は奈美に合わせる。

なぜなら時間はいつも『パパ』に合わせる事が多い。

こういう風に聞くと事は、大体予定が無い日だよなぁ。

「う～ん、今日は連絡まだ無いんだよねえ。とりあえず駅に向かう？」

「うん」

そう言って会計を済ませると私達はとりあえず駅に向かう事にした。

「わぁ、すごい人！なんでなんで？なんかあるのかな？」

「奈美・・・今日金曜だよ」

「あ、そっか！」

曜日の感覚なんて奈美にはない。

毎日は『暇つぶし』と言う奈美らしい感覚だと思った。

交差点で信号待ちをする人達。

駅へ向かう人と、何処かへ向かう人。

金曜の夜は三者三様。

「う～ん・・・マスターのどこ行く？」

「うん、私はどっちでもいいよ」

行きつけのBarは私達のたまり場になってる。

『そこに行けば誰かがいる』

そんな感覚をもたらしてくれる【free】は私達には大切な場所なんだ。

会話をしていると、横から聞き慣れない声が聞こえて来た

「ねえねえ何処行くの？マスター？俺達も連れてってよ～！」

「ちょ・・・ナンパ??」

奈美がすかさず嫌そうな話す。

「う～ん・・・ナンパって言うか。どっか会った事ない？ほらほら!？」

そう言うと、その男は「みてみて」と言わんばかりに奈美に顔を近づけてくる。

「アハハ！今時『会った事ある』とか古いっしょ」

奈美は一人で大笑いする。

私は横で苦笑いするばかり。って言うか反応なんかしたら付け上がるよ・・・
こういう人達は本当に苦手。ううん、嫌い。

「お、笑っちゃった！こりゃあ俺達と飲みに行くしかないよねえ！なっ！浩司！」

「ああ！そうだぜ！せっかくの出会いなんだから楽しく笑いあおうぜい！」

典型的なナンパ。

奈美がこんなお金の無さそうな男達になびくはずがない。

そう思って安心していた。

「アハハ、キミ達面白いねえ！奢り？」

「ちょっと！奈美！」

お願いだからそんな冗談やめてよ！

普段の奈美なら絶対になびかないような経済力の無さそうな男なのに。
一緒にいてナンパを弾いてくれるのは常に奈美の役割じゃない！

「もちろん奢るよ！可愛い子には奢っちゃう！俺の体も奢っちゃう！」

はあ・・・

最低な下ネタ。気分が滅入る。

「奈美・・・帰ろうよ。こんなの相手しちゃダメだよ」

私は小さな声で耳打ちをした。

あからさまな行動だけど、二度と会う事の無い人達に気を使うほど優しくはないもん。

「ちょっとだけ付き合おうよ！だってめっちゃいい男だよ？私だってたまにはいい男相手に楽しみたいじゃん！」

「ちょ！ちょっと！奈美！！本気で言ってるの？帰ろうよ！」

「ちょっとだけ、ね？」

こういう時の奈美は強引。私の気持ちなんて全然考えてないでしょ？

確かに『パパ』と少し喧嘩をしたような雰囲気だったし、それが理由かもしれないな。

『少しだけ』

私はこの言葉を信じて、奈美に少しだけ付き合う事にした。

ナンパされるなんて・・・

今日はなんて最悪な日なんだろう・・・

結局飲み直す事になり、四人は飲み屋へ行く事にした。

どうせ飲むならマスターの所で飲みたいのに。

声をかけてきた調子の良い男の名前は純。

もう一人の男は浩司。

「出会いに乾杯」

そんな寒い事を言う。

いわゆる『合コンでモテるタイプ』なんだろうな。

お互いに軽い自己紹介。

何故か職業は教えてくれなかったので私達も詳しくは言わなかった。

もっとも、奈美は仕事なんてしていないけど。

「そろそろ次の場所に移動する？」

純が話す。

時計は12時をまわろうとしているのに、この人は何を考えてるんだろう。

「奈美、もう帰ろう？終電だって無くなるし・・・」

私は再度、小さな声で奈美に釘を刺した

「え～！いいじゃ～ん。どうせパパからも連絡来ないしい！」

あ～あ、完全に酔っぱらってるじゃん。

自暴自棄になるのはいいけど、私を巻き込まないでよ。

「え？奈美ちゃんって良い所のお嬢ちゃんなの??」

「え～、そうだよお！エヘヘ」

純の話しに奈美が乗る。

この流れで『パパ』と言う単語をお嬢さんだと思ふ所に私は病んだ。

うん・・・

間違いなく純って男の頭の中はからっぽだ。

そんなからっぽの男と同じ席にいる事がどんなに嫌な事か・・・。

「ヒナ～！飲みが足りないからノリが悪いんだよ～！」

奈美が余計な事を言う。

そんな事を言ったら私に火の粉が来るじゃない・・・

「そうだそうだ！飲め飲め～！」

男二人がハイテンションで私にお酒を渡す。

3対1

断っても断っても口の近くにグラスが来る。

私はその行為に怒りを感じて、グラスを飲みほした。

これで満足？と言わんばかりにみんなを睨む。

「おお～！飲めるじゃ～ん！」

男二人の歓喜の声。

はっきり言ってここから先はあまり覚えていない。

なんて言っても私はそんなにお酒が強くないもん。

それが一気飲みなんて・・・

カラオケに歩いて行った事は覚えてる。

でも記憶が薄い。

奈美は浩司に寄りかかりキスをし、いちゃいちゃしてる。
今にも何かを始めそうな雰囲気。
それだけは覚えてる。それ以降の記憶は・・・無い。

【2】

2010年9月18日（土）09：19

朝、目が覚める
とにかく頭が痛い・・・
ここは何処なんだろう？

ハッと辺りを見渡すと、知らない部屋。
閉鎖的な感じのこの部屋はあまり慣れていないけど、どういう場所かは分かった。

隣にはあまり見たくない顔。
純が居た。
そして・・・裸の自分に愕然とした。

「も・・・もしかして・・・」

最悪を考えた。
ううん、きっと最悪な事しか無かったと思う。

最低だ
私は最低だ

自分に嫌悪感が襲って来た。

「ん・・・、ふぁ～。あ、おっはよう！」

昨日と変わらず軽いノリの純に苛立った。

「ちょっと！私・・・記憶が無いんだけど、変な事してないよね！？」

私は自分の体を守るようにシートを覆い、問いただした。

「へ？変な事はしてないんじゃない？男女の営みだし！」

純に聞いたのが間違いだった。

この人の頭の中はからっぽを乗り越して、何か湧いてるんじゃないの？

「信じられない！人が酔ってる事をいい事に・・・サイテー！」

「ちょ！おいおい！だってヒナちゃんもいいよって言ったじゃん！最近寂しいからって」
「そんな事言っていない！ちょっとあっちに行っちゃってよ！着替えるから！」

「な・・・」

何か言いたそうだったけど、渋々に純はお風呂場の方へと向かって行った。

あんなの嘘に決まってる！

私が記憶が無い事をいい事に、自分の好き勝手に言ってるだけだ！

はぁ・・・

最低な一日。

—2010年9月18日（土）19：20—

夕方にもなっても自分の嫌悪感から抜けられない自分がある。

苛立ち、落ち着かない。

「ダメだ・・・出掛けよう」

私はいつものBarに行く事にした。

少なくとも誰かいるだろう。一人の時間は・・・嫌すぎる。

「マスター、こんばんわ」

「あ、ヒナちゃん。どうしたの今日は？早いね」

「うん・・・ちょっとね・・・」

店内に入って周りを見渡した。

ちらほらお客さんはいるようだけど・・・

知ってる顔はそこにはない

「何か飲むかい？」

「うん・・・モヒート貰える？」

「これまた珍しいのを注文するね」

そう言ってマスターは慣れた手つきで私のドリンクを作ってくれる。
しかし、私に手渡したのは女の人。

「あ～ら、モヒート飲んでるなんて。お・と・な」

「楓さん、からかわないで下さいよ」

「何かあったんでしょ。じゃなきゃいつも甘いドリンク飲んでるヒナちゃんがモヒートなんて飲むわけないわ」

楓さんはこの店【free】の看板娘的な存在。
いつも大人の雰囲気、そして私達をいつもからかう。

「お姉さんに話したら？楽になるわよ」

「結構です」

「あらあら、ヒナちゃんなのに・・・」

この『ヒナちゃんなのに』って言うのは鳥のヒナからきてる
ピーピー泣くヒナ鳥のように・・・

こういう時に限って誰も来てない。
これじゃあ私が格好の的じゃない。

2時間飲んでても誰も来ない！
誰か知ってる人が一人くらい来ても良くない？
店内はカップルか、一人で飲んでる男ばかり。

「マスター、もう一杯ちょうだい」

「ちょっとヒナちゃん・・・飲みすぎだよ？」

「いいの！飲ませてよ」

私はお酒が入ったせいか、いつもより強気でいた。
お酒で昨日の出来事を忘れたいのかも。

「あら、やっぱり何かあったのね。話した方が楽なのに」

マスターの隣で洗い物をしている楓さんが私に話す。

「や・だ！だってみんなに幻滅されるもん！」

「幻滅されるような事しちゃったのねえ」

「あ・・・」

まるで見透かしたかのように私の目を見てる・・・

「クスッ」っと笑い、洗っていたグラスの雫をふき取り、いつもの場所へと戻す。

「楓ちゃん、意地悪言ったらダメだよ。ヒナちゃん、何かあったんなら言ったらいいよ。話した方が楽な時だってあるんだから」

「うん」

いつもの面倒見のいいマスターは相変わらず優しい目で私を覗き込んでくれる。
私達はマスターの人柄でここにいるんだって再確認した。

「う～ん・・・言えない」

「そりゃあ言えないわよねえ。付き合っても無い男と寝たなんて」

「ちょっと！なんで知ってるの!？」

「ヒナちゃんが『幻滅される』ような事ってそれくらいでしょ？」

そう言ってまた「クスクス」小さく笑う。

「相変わらずの『ヒナちゃん』なのねえ。それくらい誰でもある事よ。抱いてやったくらいに思ったら？」

「そんな風に思えません！私そんな女じゃないもん！」

横でマスターがまあまあと制止に入る。

っと言っても興奮してるのは私だけで、楓さんは少しも動揺していない。

———ドアが開く気配がした

「ちょっと、ヒナの声外まで聞こえてるよ〜」

明るい声と共に、奈美が店内へと入ってくる。

いいもんっ！どうせ私はヒナだよ！

「なにになに、どうしたの〜？あ、ってか昨日どうなった？」

「・・・今その話ししてたの」

私は思いっきりムスっとした顔で答えた。

「ん？ああ、やっちゃった？」

そんなにストレートに言わないで欲しい！

こんなにも悩んで、こんなにも嫌悪感に襲われて・・・

その中でついさっきみんなに知られた事実をこうもさらっと言うんだから

「ふふふ・・・奈美ちゃんは相変わらずステキね」

「え、本当？ありがとう楓さん！」

あからさまな皮肉にお礼を言う。

奈美には皮肉は効かないんだなって思った。

「そっかあ、ヒナがしちゃったかあ。久しぶりはどうだった？」

「久しぶりも何も・・・覚えてない」

「ええ？覚えてないって・・・まったく？」

「そうなの、覚えてないの！起きたら裸だった」

今日の朝の出来事を私は説明していたが
マスターは聞いてはいけない話しだと思ったのか、向こうをみて違う事をしている。

「アハハ！それ最悪じゃん！酔った勢いを越えてるね」

「笑い事じゃないよ・・・はぁ、ホント最悪」

顔に手を当てて、朝の出来事を思い出した。
また嫌悪感が蘇ってくる。
どうしてあんな事をしちゃったんだろう。

「奈美は？」

「え？あぁ、もう超最低！ヘツタくそ！やっぱ顔だけの男はダメだね。しかも若いし」

「ふふふ・・・奈美ちゃんのパパには遠く及ばなかったのね」

「それ所じゃないですよ！事あるごとに「ここが気持ちいいの？」とか「ほら、凄いだろ？」
って。完全に萎えた」

萎えたという言葉が女性も使うんだなって横で聞いてて思った。

「やっぱ顔だけの男ってダメだなぁ。きっと努力しないんだよ！女性を喜ばせる努力を！」

「ふふふ・・・そうね」

完全に大人二人の世界だよ・・・

私は入り込めそうになかったので、残りのモヒートを飲みほしてマスターに右手を差し出した。

「それよりも心配ね」

楓さんは不安そうな顔で私を見つめるてくる・・・

「え？私？？どうして？」

「記憶が無いんでしょう？ちゃんと避妊したの？」

避妊・・・

そこまで深く考えていないよ。

って言うよりも、してしまった事の事実に嫌悪感がいっぱいだったので、そこまで考える余裕が無かったし。

「多分・・・大丈夫だよ」

私は不安を取り除くように、グラスに手をかけた。

「純だっけ？あいつチャラそうだったじゃん。ホントに大丈夫？」

「そう言う奈美は？」

「私はしっかり付けさせた！今日は危険日だよって言ったらビビってたもん」

そう言って一人で大爆笑する奈美。

横ではそれを面白そうに「クスクス」と笑う声が聞こえた。

「妊娠・・・って事だよな？」

「それだけじゃないわ。避妊は性病なんかも防いでくれる。遊んでるような男なら尚更心配だわ」

細くて綺麗な指先が私の顔をなぞるように触れる。

それを私は振り払って楓さんに話しかけた。

「止めてよ！映画やドラマじゃあるまいし！もうこの話し止めよう？」

「そうね・・・」

今にも途切れそうな小さな声で楓さんは言った。

その遠くを見つめた目は、どこか潤んでいるようにも見えた。

これが始まり

ううん、『終わり』だった